いらない いらない いらない いらない

講談社

「名探偵」に名前はいらない
定価＝一二〇〇円
著者＝関川夏央
昭和六十三年四月十五日　第一刷発行

発行者＝加藤勝久
発行所＝株式会社講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一　郵便番号一一二
電話（〇三）九四五―一一一一（大代表）
印刷所＝豊国印刷株式会社
製本所＝株式会社黒岩大光堂
©Natsuo Sekikawa 1988 Printed in Japan
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。
ISBN4-06-203751-3 (0)

「名探偵」に名前はいらない——目次

悲しみの街角——5
リスボン発二二時五〇分——67
十二月にできた友だち——131
渡るべき多くの河——215

イラストレーション／大橋　歩
ブックデザイン／日下潤一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「名探偵」に名前はいらない

悲しみの街角

1

秋は鮮やかにやってきた。床に紙質の硬い雑誌をずりおとし、かわりに一枚の毛布を顎までひっぱりあげ、一九四五年の秋にゴミ捨場で死んだパルチザンのように背をまるめ、両膝を腹にひき寄せていつものようにけじめなく眠りについた。

おれの眠りはいつもそうだ。たとえばこんな不吉なファンタジーをよく経験する。カシミールの山のなかをさまよっているとつゆ知らずにいつの間にか中国国境を越えている。本人には越境の意志などまるでない。しかし、自分の凍る息の輪からふと視線をあげると、山稜には狙撃兵たちが送電線のスズメのように並んでいるのが見える。なにが起こったのか理解できないままにたたずむ。きびしい声調の中国語の警告が体につきささる。それでもおれは動かない。動けないのだ。数秒か数十秒後には結氷した顔面を一種の清涼感をともなって貫いていくライフル弾の予感がし、予感はやがて確信にかわる。確信はすこしずつ恐怖に形を変え、恐怖はわずかの熱を呼び、凍った眉を溶かす。水滴が流れ、眼に入りこみ視界がにじむ。おれは、なぜか自分の部屋の窓辺にかけたままの洗濯ものを思い出す。おりたたみ、鼻を押し当て、それから引き出しにしま

わなければ。こう寒くては凍って繊維がばらばらになってしまう。おれはどこか知らない国の言葉で、山稜のスズメたちに叫ぶ。待て、射つな。洗濯ものをとりこむまで待ってくれ。

眼覚めると、開け放した窓から風が吹き込んでいた。口のなかに冷やされすぎたビールみたいな不快な感触が残っていた。平たくなったラミネート・チューブから最後の練歯磨を押し出すように勇気を絞り、おれは床のうえに両足の裏をつけ、それからゆっくり立ちあがった。吹き込んでくる風にはもう夏の白さはなかった。薄いレモン色のフリルがついていた。そのくせどこかひえびえとしている。おれは、きのうの夜の残りをあたためなおした、いくらバンコクのホテルでも客に出さないほど味の壊れたコーヒーを口にした。

テーブルの上にスペースを無理につくってコーヒーカップをおき、両腕で自分の肩を抱いた。処女を天蓋つきのワゴンで売っている若い女のポーズが似合うと考えているわけでは決してない。寒かった。

秋の訪れは急だった。

満州の森のなかで何ヵ月も剣を研ぎつづけてきた老人が、ある夜明け前に突然立ちあがり、いまはインディアンペーパーよりも薄く研ぎだした剣に一度しごきをくれてから、いきなり夏の空を切りおとした、そんなふうだった。

出掛ける覚悟を決めきれないでいた。

風の道になった部屋のまんなかにいながら、自分のいる場所を見失った気分になる。「当惑」という文字が浮かび、底知れない居心地の悪さを感じる。両手を祈るようにあわせて、女の脚の間にはさみこんで眠りなおしたいと痛切に思う。しかし仕事は仕事だ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

2

彼女は台所からコーヒーカップをふたつ、お盆に入れて運んできた。それをテーブルの上に置くとき、襟元がゆったりとひらき加減の薄いセーターの隙間から乳房の谷の入口がのぞけた。肌は卓上の陶器のミルクピッチャーの表面みたいに白かったが、それほどには冷たくなさそうだった。てのひらをおけばたちどころに薄赤く染まるだろう。それは、リトマス紙を夏みかんの果肉に触れさせることとおなじくらいに確かなことだと思われた。しかし、彼女が意識してそんなセーターを着け、そんな姿勢をとったのかどうかはおれには判断がつきかねた。

「ミルクとお砂糖は？」

と佐野雅子はいった。

「いれたほうがいいと思いますか」

とおれはいった。

「お好きなようになさってください」

結局なにも彼女はいれなかった。

「こんなに朝早く起きるの？　探偵って」

「普通、名探偵は眠りません。わたしはそれより少しだけ水準が落ちるので片眼をあけて眠ります。それでも時どきは眼を休める必要があるので交互に。月曜日には左眼をつむり、火曜日には右眼をつむるというスタイルでやります」

佐野雅子は微笑しただけだった。

「まさかあなたが探偵になってるなんて。驚いたわ」
「ネコに葉巻を吸う身分になれっていっても無理ですがね、人間はなりたいと念じればたいていのものにはなれるものですよ」
「念じればいいんですか」
「そうです。念じればいいんです。それから努力をするんです」
「どんな努力？」
おれはコーヒーカップをとりあげて口に運んだ。強いにおいがした。アメリカ式の薄すぎるコーヒーを一時間に一リットル近く飲むタイプの男には刺激が強すぎた。
はじめて彼女と正対したとき、実に奇妙なことにおれは高校の文芸部のニキビ面の男に部室へひきいれられて見せられたエロ写真を思い出した。文芸部の男は普段、雪のうえに散った煤煙こそわたしの悲しみである、といったばかばかしい詩ばかり書いているくせに、エロ写真を見つめるおれの表情を小ずるそうにうかがった。その顔は「カンタベリー物語」の破戒僧よりも下品だった。二本の指をさかさまのVサイン状に使って自分の性器を押しひらく若い女は、むしろ気高い顔をしていた。気分が悪くなり、その写真を彼に返した。それから文芸部室のガラス窓を一枚叩き破った。ニキビ面はおびえていた。おれはそれ以来、美しい顔の女ほど醜い性器を持つと信じるようになった。
「どんな努力？」
と雅子がもう一度尋ねた。
「そうですねえ」とおれはいった。「たとえば、簡単なことです。ひとの言葉をすべて信じる努力。同時にひとの言葉をすべて疑う努力」

「簡単かしら」
と雅子がいった。
「簡単です」
とおれは答えた。
「簡単だろうと思っています。そう思わなければわたしの商売はやっていけない」
あけはなった窓から風が吹きこんでくる。庭にモクセイの花が咲き、香っている。彼女のつけている香水を打消すほど強く香った。毎日この庭を見つめながらこの女はなにを考えて暮らしているのだろう。たとえば、遺言の文句を考えている。わたしが死んでも窓はいつでもあけたままにしておくように、庭と花々が見えるように――というふうな。
ドアの脇の壁にはフジタが一枚かかっていた。大判の絵ハガキくらいの大きさで、溶けたロウの色の肌をした若い女がカフェの高いスツールにすわって、曇り空のおもてをガラス越しに眺めている。注意深くみると、そこはパリ六区、レンヌ通りとラスパイユ通りの交差点にあることが標識から読みとれる。
さりげない飾りかたから見ると、ひょっとしたら本物かも知れない。この食事室と居間を兼ねた広い部屋には装飾はほとんどない。ブリタニカの英語版の百科事典も、無造作に投げだされた「ジャルダン」や「エル」もない。毛糸の玉も、つくりかけの刺繍もない。ネコもイヌもいない。実用的だとはまるで思えないマントルピースのうえに銀色の小さな盃がぽつんとのっている。台座には由来がなにも記されていない。ただ「KYONAN '69」というプレートだけがはめこんである。
「お好きなんですか？」

と雅子が突然いった。
「は？」
「あるいはご自分にあっていらっしゃる。あなたのお仕事」
おれは、彼女の質問を無視して、大きく切られた窓を通して見える明るい空に眼をやった。そのまま長い時間じっとしていた。そして片手をズボンの尻ポケットにやった。それ以外にはまったく体を動かさなかった。
雅子の視線が揺れた。
「どうかしました？」
おれは顔の位置を動かさなかった。
いいえ、心配しないで、といいたかったが、声がでなかった。
おれはポケットから大きなハンカチをとりだすと顔をそむけ、おおった。それから思いきり大きなくしゃみをした。
雅子の緊張がゆるむのがはっきりわかった。
「どうもね」とおれはいいかけ、またひとつくしゃみをした。「風邪をひいたようです」
「窓をしめましょうか」
と腰を浮かしかけた。
「いや、大丈夫。モクセイのいいにおいが強すぎるんです。鼻が驚いているんです」
とおれはいい、ハンカチで音たてて洟をかんだ。
「なにかあたたまるものを飲みますか」
と雅子はいった。口調も表情も少しも心配そうではなかった。

「いえ結構。たいしたことはないんです。ただ、くしゃみだけが我慢できなくて」
雅子はなにもいわずにおれを見ていた。かすかに喉が動いた。夏休みの宿題をやり残したまま学校に渋々やってきた小学生みたいな気持にさせる視線を彼女は持っていた。つまりなにか弁解したくなる。
「自分にあってるかって訊きましたね、この商売が。多分あっているんだと思いますよ。少なくとも朝の電車に乗らなくて済むのはとても気分がいい」
「満員電車？」
「満員といういいかたは手ぬるすぎる。むかし、インドでベンガル人が使った穴みたいなものですよ。六メートル四方の四角い穴のなかに百二十人のイギリス人を詰めこんだそうです。二日たったら生きているのは何人もいなかった」
「アメリカの学生がよくやるでしょ。電話ボックスに何人入れるか競争する」
「そうです。日本人は毎日あれをやっているんです。命がけのゲームをしながら会社へ通っている。とりわけ池袋新宿間なんてすごいものです。ひさしぶりに乗ってみましたがね、感動しました」
「感動？」
「ええ。発見といってもいいな。あの、恐縮ですがやはりいただけますか、体のあたたまるもの」
雅子は笑いながらおれをにらむ真似をした。宿題を忘れた小学生の弁解に説得されたふりをする女教師の役になろうというらしい。
「ワインでいいかしら。少し残ってるの」

「白だったら」
白だったらいらないといおうとした。どうせ冷蔵庫で身もふたもなく冷やしてあるはずだ。風邪薬としてはふさわしくない。
「赤。安物」
「なんですか」
「コート・デュ・ローヌ」
「そいつはいい。名うての安物だ。なまぬるいコート・デュ・ローヌを飲むとパリ時代を思いだす」
「あなたパリにいたことがあるの？」
雅子は立ちあがりかけた姿勢のまま尋ねた。
「ありますよ、三日だけ。三年間、昼を抜いて団体で行ったんだ」
おれは台所の雅子に向かって喋りつづけた。ここからでも食器棚の隙間を通して雅子の体の一部が見えている。
「なに？　発見て」
「発見？　ああ、つまりですね。なぜ日本人が過酷な宗教を持たずに済むかということ」
「え？　なんですって？」
雅子の声がいくぶん大きくなった。
「宗教のひとつの意義ってのはですね、地獄のイメージを提示することだと思うんです。ひとはそれに従って自分の行動を律するんです。ところが日本人には、少なくとも東京人には、さらに少なくとも池袋新宿間の電車を利用するひとには地獄のイメージなんて必要ない。毎朝経験して

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com